

目 次 / 「近代法思想史入門：日本と西洋の交わりから読む」

はじめに

第1部	近 代 へ
-----	-------

第1章 法と権利 ————— 3

第1節 近代化と東西 3

大政奉還と廃藩置県

第2節 法と正義 4

「ラウは法の義なり」 / 「法」と「のり」 / 「法」の輸入 / 王政復古と新制度

第3節 「権利」の成立について 7

「権」について / 「万国公法」と権利 / 「公権」と「私権」 / 「利」について / 江戸の儒学 / 利や欲の肯定 / 「権利」の限界と可能性 / 「権 理」 / 「私権」と統合

第4節 性 法 13

性法と法哲学 / フランス法派 / 性法と立法者 / 自然法論（性法）と法哲学 / 「性法」の由来 / 西欧哲学の流入 / フィッセルリングの性法講義 / 性法論への懐疑と読みかえ / 西の功利主義と社会観 / 「性法」の自由主義的側面

第2章 自然法思想 ————— 21

第1節 人定法と自然法 21

古典における対置 / キリスト教的自然法論 / スコラ哲学と「教令注釈学派」

第2節 権利としての ius 24

権利と人間の力 / 所有権 / 清貧論争

目 次

- 第3節 自然権論 26
グロティウス / ホッブズ
- 第4節 統治の正統化 29
フィルマーとロック / 人権宣言と権利章典
- 第5節 近代自然法論の展開とその批判 31
ドイツの自然法論 / イギリス経験主義の道德感情論 / ルソー
/ カントとヘーゲル / 功利主義の自然権批判

第3章 公と知識人 _____ 40

- 第1節 明治初期の憲法論と「公」「公議」「公論」 40
御誓文 / 会盟式から会誓式へ / 幕末公論の源流と大政委任論
/ 公論と輿論
- 第2節 明六社のひとびと 43
結社と構成員 / 学者の職分と公私 / 明六社における時期尚早論
とその批判
- 第3節 共存同衆とイギリス法思想 46
共存同衆の起源 / 結社の方針 / 馬場辰猪とイギリス / 歴史
主義と法実証主義 / 小野梓と功利主義：法制の要件と目的 / 社
交の自由、政体論 / 結社への圧力
- 第4節 社会契約論：ルソーの受容 49
王政批判の哲学者たち / ルソーの受容 / 社会契約論 / 兆民
と漸進主義
- 第5節 保守派 52
王政と公 / 君徳輔導の方針 / 宮中派と府中の対立 / 金子堅
太郎とパーク / パークの保守主義

第4章 憲法と自治 _____ 58

- 第1節 議会の開設と自治論争 58
民主主義の学校 / 「アメリカのデモクラシー」 / 「惑溺」と「名
分論」(福澤) / 三新法体制とその評価 / 政府側の立憲論 /
民権派の国会開設運動 / さまざまな憲法案の登場
- 第2節 独逸学と進化論 63
プロイセン型憲法構想と公式学問 / 独逸学協会 / プレンチュリ

	の影響 / 加藤の進化論と天賦人權説批判 / 馬場と植木の加藤批判 / イェーリング批判	
第3節	伊藤の憲法調査 67	
	グナイスト / シュタイン / 帰国と憲法制定	
第4節	府県制・市町村制をめぐる論争 69	
	府県会の現状 / 内閣原案とモッセの構想 / 井上毅・ロesslerの批判と自治の限定	
第5章	初期明治憲法理論	74
第1節	国家法人説、穂積八東と一木喜徳郎 74	
	日本公法学の確立と留学 / プロイセン憲法争議と予算法論 / 一木の「法令予算論」 / 穂積八東の法実証主義	
第2節	国体論の由来 79	
	尊皇と儒教、霸道と王道 / 皇国と大政委任 / 「国体」の歴史的起源	
第3節	国体と法理 82	
	国体と憲法・教育 / 国体・天皇即国家と法理 / 穂積憲法学と国体の基礎づけ	
第4節	上杉・美濃部「国体」論争 86	
	経歴と方法論 / 憲法講習会 / 国体論争：主権と機関 / 国体と国家形式 / 美濃部の権威と事件 / 上杉と軍、国体擁護 / 皇道と相関連続 / 一視同仁	

第2部

社会とデモクラシー

第6章	明治民法学	97
第1節	法典論争からドイツ法学へ 97	
	民法典編纂事業 / 日本の法学教育 / 法典論争 / 八東の「家」思想 / ドイツ民法学への傾斜	
第2節	ドイツ法典論争 103	
	19世紀初頭のドイツ / ティボー / サヴィニー / 平野義太郎	

によるドイツと日本の比較

第3節 鳩山から末弘へ、ドイツから英米へ 106

鳩山秀夫の登場 / 末弘巖太郎の判例研究

第7章 刑法理論の対立 _____ 109

第1節 日本における「刑法」の導入 109

律令的刑法から近代的刑法へ / 旧刑法 / 現行刑法

第2節 旧 派 112

ベッカーリア / フォイエルバッハ / 新古典学派 / 後期旧派理論

第3節 新 派 116

ロンブローゾの衝撃 / リスト

第4節 日本における新派の登場 118

富井政章 / 牧野英一

第5節 日本における旧派の台頭 120

大場茂馬 / 瀧川幸辰 / 小野清一郎 / 「日本法理」論

第6節 囚人の処遇問題 122

監獄行政の困難さ / ゼーバッハ / 小河滋次郎と監獄法

第8章 大正デモクラシー _____ 127

第1節 吉野作造の民本主義 127

吉野の思想形成 / 民本主義 / 吉野への敵意

第2節 デモクラシーの思想 130

デモクラシーの思想史 / ハンス・ケルゼンのデモクラシー論 / カール・シュミットのデモクラシー論

第3節 「アメリカ」の登場 134

アメリカとの接触 / 学問的衝撃 / 文化的衝撃

第4節 社会主義、社会運動 136

日本の社会運動と法規制 / 女性の労働環境

第5節 日本の女性解放運動 138

岸田俊子 / 『青鞥』の誕生 / 母性保護論争 / エレン・ケイ

第6節	西洋におけるフェミニズムの展開	141
	フランス革命 / 第一波フェミニズム / 第二波フェミニズム	
第9章	マルクス主義法学	145
第1節	マルクス主義の形成	145
	マルクス主義誕生の背景 / マルクスの思想形成 / マルクスとマルクス主義	
第2節	日本におけるマルクス主義法学とパシュカーニス	147
	日本のマルクス主義法学 / 所有権理論の修正 / 「自由に意欲する人間の共同態」 / パシュカーニス『法の一般理論とマルクス主義』 / パシュカーニスと加古祐二郎	
第3節	日本における社会法の登場	151
	労働法の形成 / 労働法学と末弘厳太郎 / 社会保障法の形成 / 救護法	
第4節	ラートブルフとジンツハイマー	155
	ラートブルフの思想形成 / ラートブルフ受容 / 労働法の父・ジンツハイマー / ジンツハイマーの学説	
第5節	森戸事件と瀧川事件	158
	森戸と大逆事件 / クロボトキン研究 / 瀧川のトルストイ講演 / 瀧川事件の背景 / 瀧川事件と東大	
第6節	恒藤 恭	162
	恒藤の思想形成 / 恒藤とマルクス主義	
第10章	国際法と国際政治	165
第1節	戦争の思想史	165
	正戦論 / 無差別戦争観 / 戦争の違法化 / 差別戦争観	
第2節	国際連盟	168
	平和組織の思想 / 19世紀の運動 / 国際連盟の誕生 / 国際連盟と日本人	
第3節	横田喜三郎とケルゼン	171
	横田のケルゼン受容 / 純粹法学 / ケルゼンの国際法学 / ケルゼンの国際連盟評価	

目 次

- 第4節 リアリストとしてのシュミット 174
シュミットと国際法 / シュミットの国際連盟批判 / 広域秩序
- 第5節 モーゲンソー 176
国際法学から国際政治学へ / 『国際司法』 / モーゲンソーとケルゼン
- 第6節 国際社会の中の日本 179
不平等条約問題 / 大東亜共栄圏 / 大東亜国際法

第3部

2つの「昭和」

第11章 国粹主義の法思想 ————— 185

- 第1節 「欧化」から「国粹」へ 185
「欧化」と「国粹」 / 「欧化」から「国粹」へ
- 第2節 個人商店的国家から大企業的国家へ 187
個人商店的国家 / 大企業的国家へ
- 第3節 筧克彦の法思想：「神ながら」の国の法思想 189
筧の原型 / ギールケの国家論 / デルタイの生の哲学 / 普遍我としての国家 / 神ながらの国、日本 / 筧と欧化思想
- 第4節 北一輝の法思想：純正社会主義思想の法思想 194
北の生涯 / 社会民主主義と純正社会主義 / 北の歴史観：明治維新と国体論 / 『日本改造法案大綱』 / 北の影響
- 第5節 蓑田胸喜の思想：戦闘的国粹主義者の否定思想 199
攻撃者としての蓑田 / 原理日本社と原理日本 / 美濃部批判と「護憲」派蓑田

第12章 天皇機関説事件の法思想 ————— 204

- 第1節 事件の発端 204
菊池演説 / 美濃部の「一身上の弁明」 / 「弁明」に対する反応 / 『国体の本義』
- 第2節 天皇機関説事件の遠因 208

	大学の弱体化 / 南北朝正閏事件	
第3節	天皇機関説事件に関する従来の分析枠組み	210
	「自由主義者」美濃部という理解 / 帝国憲法における「顕教」と「密教」	
第4節	「国体」という問題	211
	国体憲法学派と天皇主権説 / 美濃部憲法学における「国体」の意義 / 不文法源としての国体 / 立憲主義の国体論	
第5節	国体憲法学派の国体論：里見岸雄の国体論	217
	従来の学説と国体憲法学 / 里見の国体論 / 国体憲法学派の美濃部批判 / 事件の法思想的意義	
第13章	総動員体制(新体制)の構築と法思想	222
第1節	天皇機関説事件後の立憲主義	222
	統治システムの破綻 / 新体制の必要性と意義	
第2節	黒田覚の法思想	224
	転向者の典型? / ケルゼニストとしての黒田 / スメント、シュミットの影響	
第3節	国家総動員法の成立	226
	総力戦の構築 / 国家総動員体制の成立	
第4節	国家総動員法をめぐる法的論争	229
	国家総動員法の違憲論 / 政党勢力による違憲論 / 黒田の合憲論 / 革新政治の意義	
第5節	大政翼賛会の違憲論：現状維持派と新体制派の論争	233
	大政翼賛会 / 黒田の合憲論 / 佐々木の違憲論 / 黒田の主権論：憲法制定権力	
第6節	時代の要請とオプティミスト	237
第14章	戦時体制下の法思想	240
第1節	戦時統制と国民生活	240
	治安維持法制と思想統制 / 総力戦のための経済社会体制の確立	
第2節	非常大権と国家緊急権の展開	244
	非常大権と国家緊急権 / 国家緊急権の意義 / 黒田の非常大権論	

目 次

／ 大串兎代夫の非常大権論 ／ 新体制派と憲法論

第3節 尾高朝雄の国家緊急権論 248

尾高朝雄の国家緊急権論 ／ 尾高の反論 ／ 法は政治の矩

第4節 戦争末期の法思想 253

大串の尾高への反論 ／ 非常大権委員会 ／ 政府の対応 ／ 全権委任法の成立と大串

第15章 新憲法体制の法思想 ————— 257

第1節 占領体制と新憲法 257

アメリカの初期占領政策 ／ 憲法改正の動き ／ GHQの憲法案

第2節 法制度の改革 260

戦後の社会改革 ／ 民法の改正 ／ 刑法の改正

第3節 美濃部達吉と新憲法 262

美濃部の反対論 ／ 心理的統合としての天皇 ／ 機能的統合としての官僚

第4節 宮沢俊義の憲法観：八月革命説とケルゼン 266

八月革命説 ／ ケルゼンの十月革命説 ／ 十月革命説と八月革命説

第5節 ノモス主権論の意義と尾高・宮沢論争 270

ノモス主権論 ／ 美濃部の天皇制論とノモス主権論 ／ 尾高・宮沢論争の意義

第6節 戦前と現代のあいだ 273

人名索引

事項索引